



Claude Chabrol

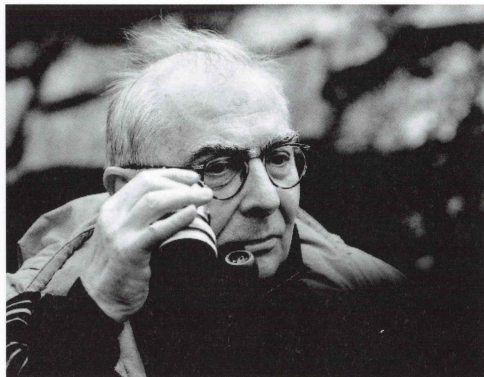
新文芸坐シネマテーク vol.36 クロード・シャブロール特集

05.20 (Fri) 『仮面』 Masques

05.27 (Fri) 『野獣死すべし』 Que la bete meure

Indie
Tokyo

新文芸坐



クロード・シャブロール Claude Chabrol

1930年6月24日、パリ生まれ。父親は薬剤師で、彼も薬学を専攻した。アンドレ・バザン時代の「カイエ・デュ・シネマ」で映画批評を書き始め、ゴダールやトリュフォーらと出会う。1956年、妻の祖母の遺産を元手にジャック・リヴェットの短編『王手飛車取り』を製作。さらに自らの監督デビュー作『美しきセルジュ』を発表した。続く第2作『いとこ同士』と共に批評的にも興行的にも大成功を収めた。その後も数多くの作品を発表したが、敬愛するサスペンスの巨匠ヒッチコックにならって、その殆どがサスペンスやミステリ映画であった。代表作は『不貞の女』『野獣死すべし』『肉屋』『血の婚礼』『ヴィオレット・ノジュール』『主婦マリーがしたこと』『沈黙の女』『石の微笑』『刑事ベラミー』など多数。2010年9月12日にパリにて死去。

仮面

Masques

5.20[金]

1987/仏/デジタル/100分



監督・脚本:クロード・シャブロール、脚本:オディール・バルスキ、撮影:ジャン・ラビエ、音楽:マチュー・シャブロール、美術:フランソワーズ・ブノワ=フレスコ、出演:フィリップ・ノワレ/ベルナデット・ラフォン/ロバン・ルヌーチ/アンヌ・プロシェ

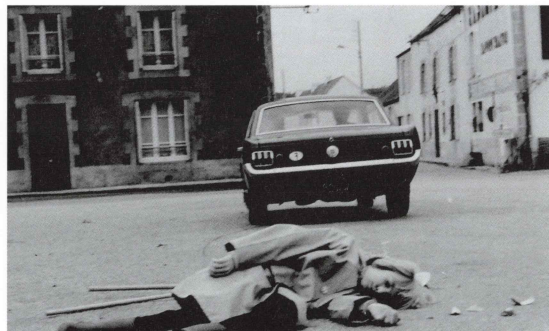
テレビの人気司会者クリスチャン・ルガニユール(フィリップ・ノワレ)は、自伝的インタビューのため自宅にロラン・ウォルフを数日滞在させる。屋敷には奇妙な同居人たちが滞在し、中でも病弱な養子カトリーヌにルガニユールはかかりきりになっている。ウォルフはルガニユールの仮面を暴こうとするが、彼もまた別の仮面を付けていた。

野獣死すべし

Que la bete meure

5.27[金]

1969/仏=伊/デジタル/107分



監督・脚本:クロード・シャブロール、脚本:ポール・ジェゴフ、原作:ニコラス・ブレイク、撮影:ジャン・ラビエ、音楽:ビエール・ジャンセン、出演:ミシェル・デュショソワ/カロリーヌ・セリエ/ジャン・ヤヌ

シャルル・テニエは一人息子をひき逃げで失って以来、その復讐に取り憑かれる。彼は脚本家のフリをして、息子を轢いた車に乗っていた女優に接近する。その女優が運転手であったなら、シャルルは彼女を殺すつもりでいた。だが、彼女の家族を知れば知るほど、彼らに対する親愛の情もまた膨らんでいくのだった。

新文芸坐シネマテーク vol.36

クロード・シャブロール特集

	開映	終映	
5.20[金]	19:20	21:00	仮面
5.27[金]	19:20	21:05	野獣死すべし

各日、映画終了後に映画批評家・大寺眞輔さんの講義が60分程度ございます※講義開始21:10~(5月20日)、21:15~(5月27日)

特別料金

一般1900円/各種割引1700円(招待券不可)

※各種割引:プレ会員、友の会、U22(22歳以下)、シニア、障がい者

※チケットは上映1週間前の9:00よりオンライン・当館窓口にて販売

※オンライン購入は新文芸坐HPよりご利用ください

共催: IndieTokyo

大寺眞輔

映画批評家、早稲田大学・日大芸術学部講師。「キネマ旬報」「文藝界」「カイエ・デュ・シネマ・ジャポン」などで映画批評を執筆。著書に「現代映画講義」など。IndieTokyo主宰。

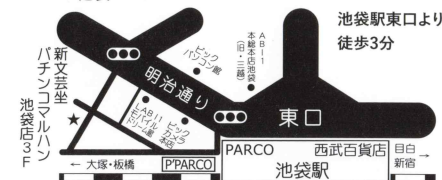


感動はスクリーンから

新文芸坐

03-3971-9422
www.shin-bungeiza.com
twitter:shin_bungeiza

東京都豊島区東池袋1-43-5
マルハン池袋ビル3F



池袋駅東口より
徒歩3分

IndieTokyo Newsletter

上映情報をいち早くお届け!メールマガジン配信中国新文芸坐シネマテークをはじめとする企画上映や海外の映画情報、映画レビューをお届けしています。購読料は無料。登録はこちらから。

